

[第10回学術集会公開シンポジウム：家族看護の実践知の探求]

家族看護コンサルテーションの実践知

家族ケア研究所

渡辺 裕子

1. はじめに

家族看護実践の質の向上には、実践現場で家族を支えるナースのサポートが重要である。本稿では、筆者が行ってきたコンサルテーションの経験から、家族看護コンサルテーションにおいて重要だと考えているポイントについて簡潔に述べていきたい。

2. コンサルテーションの目的とプロセス

コンサルテーションにおいては、相談者が、「家族に何か起こっているのかがわかった」、「自分がどこでつまづいていたのかがわかった」という知的な理解をもたらすにとどまらず、「たいへんだけれどもう一度、この家族と寄り添ってみよう」と援助への意欲をもち、相談者がエンパワメントされることを最終的なゴールとすべきであろう。そしてそのプロセスにおいては、以下の段階を経ていくことが重要である。

1) 第1期：相談者との関係を築く

コンサルテーションは、相談者が安心して自己を語ることのできる関係のもとに始めて成り立つ。まずコンサルテーションの最初に当たって大切なことは、コンサルタントが相談者に心からの敬意を払い、安心して話せる心理的環境を整えることである。そのうえで、事例の概要を相談者と共有する。そして、相談者が何に困っているのか、相談者の問題意識や違和感を言葉に出して明確にするよう促し、これから相談者と何を共に考えていったらいいのか、コンサルテーションの課題を共有する。これによつてはじめてコンサルタントと相談者は、問題解決のスタートラインに立つことができる。

2) 第2期：現象の全体像を掴む

課題を明確にしたならば、コンサルタントは、相談者からさらに事例に関する情報を引き出しながら、自分なりの家族の全体像を描いていく。そして、自分が描いた家族の全体像と相談者に映っているそれとのズレがどこにあるのかを検討する。すなわち、相談者には、家族のどのような側面が見えていて何が見えていないのかを明らかにする。

3) 第3期：現象と相談者の認識のズレを埋める

コンサルタントが考えている家族の全体像と、相談者が捉えている家族の全体像のズレが明確になったならば、まずはそのズレをどのように埋めていけばよいのか、そのプロセスを査定する。具体的には、なぜ相談者はそのように家族を捉えたのか、家族の捉え方に影響を及ぼしている相談者の家族観、これまで重ねてきた経験や体験、職場の環境などを探っていくと同時に、相談者にズレを気づかせてくれる鍵になる家族の具体的な言動は何かを検討する。そして、鍵になると考えられる家族の言動の意味を、改めて相談者に問いかけ、相談者の洞察を促す。これにより相談者は、そこまで思いが至らなかった自分や、偏った理解に止まっていたことに気づきはじめ、対象家族の洞察のみならず、そのように考えていた自分自身をも洞察するようになる。このように相談者が自己の認識の限界やズレに気づいたところで、「あなたはどのように考えていたけれど、このようにも考えられるのではないかと」と新たな家族の見方を提示することによつて、相談者は、今までにはなかった新たな家族像を形成することが可能となる。そしてさらに、ここで「……とするとあなたがしてきたことはこの家族にとってどんな意味があったのだろう」と行われた援助の意味を問いかけることにより、相

談者には、「むしろこのような働きかけが重要だったのでは……」と新たな視点で必要な援助に自ら気づいていくきっかけが生まれる。そして、その相談者の気づきが確実な援助につながるよう、現実的で具体的な援助方法を提案することにより、相談者は実際の援助の具体的なイメージを持つことができ、「これならできる」と一時的に揺らぎかけた援助者としての自信を再獲得していく。

4) 第4期：家族看護に関する動機づけ

単に事例の問題解決の見通しがたてばそれで良いというのではなく、相談者がその事例の学びを糧に、援助者としての次の成長へ段階をふめるよう、家族看護に関する動機づけをはかっていくことが重要である。具体的には、「つまりこの事例で学べたことは何だったのだろう」と相談者の事例のテーマを投げかけ、相談者が自分なりにテーマを抽出したところで、相談者にとっての今後の課題を示唆し、レベルアップした家族看護への動機づけをはかっていく。

3. コンサルタントに必要な要件

まず大切なことは、コンサルタントが相談者に対して敬意を払い、「きっと課題を達成していける」という信頼を寄せることである。そして、コンサルタント自身も無理をせず自然体で相談者と向き合うことが必要であり、コンサルタントが自己一致していることが求められる。さらに、家族の全体像を描き、相談者の認識とのズレを明らかにしていく際には、家族の立場、相談者の立場で現実がどのように映っているのか、それぞれの立場に立って考えられる複眼的な視野、そしてそれらを立体的・構造的に把握す

る思考能力も不可欠である。また、相談者が自らのズレや必要な援助に気づいていけるよう援助するためには、的確な発問ができる教育的配慮も求められる。そして、相談者と具体的な援助方法を模索する過程では、実践者としての豊かな経験が、さらに相談者にレベルアップした家族看護の動機づけをはかっていくためには、事例のテーマを明らかにする研究的視点を有していることが重要である。

これらのことを概括すれば、コンサルタントに必要な能力として、①カウンセリング能力、②教育的能力、③実践能力、④研究能力の4つが必要であると言える。

4. コンサルテーション活動を普及するうえでの課題

今後、コンサルテーション活動を普及させていくためには、人材育成が急務である。家族看護専門看護師の誕生に期待することは勿論のこと、さらに各実践現場で身近にスタッフのコンサルテーションに応じることのできる人材を育成していくことが求められている。そのためには、まずはそれぞれのナースが自らの実践を語ることのできる力をつけていくことが不可欠であろう。そして、このような教育をはじめとして、スタッフナースの家族看護実践をサポートする組織的な取り組みをどのように整えていくかが今後の重要な課題である。

引用文献

- 1) 鈴木和子, 武守晴子, 渡辺裕子: 家族看護に関するコンサルテーションのプロセスとその特質 家族看護研究, 9 (1), 10~17, 2003